イチジク株枯病

英名：Ceratocystis canker
病原：*Ceratocystis ficiola*（子のう菌類）

被害樹の症状

主幹地際部の症状

左の樹の切断面：褐変している

キクイムシ（右）による食入痕（左）

生態と防除

発症部位　：幹、根部

発生の経過　：１．伝染源　…　病原菌汚染土壌、感染苗の定植

２．発生消長　…　７～８月頃より株の片主枝または全体の新梢が日中萎凋し、さらに進行すると下葉が黄化したり枯れ込みが見られ、最後には枯死する。また、本病に侵されたイチジク成木の主幹地際部には、紡錘形のやや凹んだ病斑が観察されることが多く、このような病斑の表皮下は形成層から木質部深くまで黒褐色に変色している。

発生しやすい条件　：地温が25～30℃で発病が多い。

防除　：薬剤のみでの防除は困難であり、根絶が難しい。園への病原菌の持ち込みを防ぐことが大切である。
予防対策として、薬剤の土壌かん注、抵抗性台木への植え替え、キクイムシの防除が重要である。

土壌診断方法

容器に現地の土壌を入れ、滅菌水を分注して湿潤状態とした後、イチジクの切り枝を土壌に突き刺しておく。

25～30℃条件下、7～10 日間たつと、本菌の子のう殻が観察できる。